

菩提達磨 (440? – 528?)

中国の歴史資料からの達磨の物語集

はじめに

達摩大師 (Bodhi Dharma 菩提達磨) は6世紀初めの頃、西のインドから東の中国に至り、大乘の仏教をもたらしたインド僧である。菩提達磨は南インドの王国の王子として生れたといわれている。中国に至り、河南省の嵩山少林寺での「面壁九年」の故事はあまりにも有名である。それは中国禅宗の淵源となり、達磨は禅宗初祖と尊崇されているばかりでなく、東地すなわち中国・日本並びに東アジア諸国の人々の生活、文化、習慣などに深い影響をあたえてきた。現代においてもその影響は衰えぬばかりか、新たに世界的展開を見せており、21世紀の今日において一層その重要性を増しつつある。菩提達磨をもたらした大乘の思想と実践とはどのようなものか、その現代的意味はどのようなものか、歴史的資料をもとに考えてみたい。

中国の記録によれば菩提達磨の生国は「香至国」と記されている。南インドと言っても広く、それがどの地かはよく知られていなかった。しかし国際化の現代において、仏教の世界化は時代の趨勢となって、菩提達磨の生地を同定しようとする試みがなされている。中国の唐の時代には、香至は“Kang-zhi”と発音されていたと考えられる。「香至」とは香気の極みの意味になるろうが、Kanchee は“輝く宝石”、あるいは“宝石の贅をつくした帯”の意味がある。“puram”は町あるいは古代の国の意である。そこで香至国は南インドの古都 Kanchipuram に違いないと、様々な資料から同定されるようになった。Kanchipuram は南インドの大都市チェンナイから数十キロ南西の町で、菩提達磨の時代にはパッラバ王朝の都があったところである。いまはヒンドゥ教の聖地になっていて仏教遺跡はほとんど消失している。わずかにチェンナイ博物館に保存されている尊厳ある仏陀立像（高さは人の丈を上回る）が、往古の仏教僧院の盛時を偲ばせる。チェンナイにあるアジア研究-研究所 (Institute of Asian Studies) では、カンチプラム Kanchipuram の街に約 88 アール (約 2700 坪) の土地を 10 年前に取得して所有している。将来その土地に記念碑、僧院 (ビハーラ)、インド哲学研究センター他の施設によって、菩提達磨を記念し顕彰することを計画している。

菩提達磨の時代は今から約 1500 年前で、達摩大師が滞在した嵩山少林寺は洛陽の東である (洛陽はいくつかの王朝の絢爛たる都であった)。そこには達摩洞と呼ばれる小洞窟が山腹にある。少林寺で神光慧可その他の弟子に大乘の法を伝えるという初期の目的を達成した。達摩大師の終焉の地は洛陽の西にある熊耳山といわれるが、菩提達磨はそのとき母国インドへの帰還の途上にあっただのではないかと思われる。

このような観点から、中国の歴史資料から達磨の物語を集めて、菩提達磨の人物像、思想、その影響等について認識を新たにするには大変意義のあることであろう。この記事が上記の偉大なプロジェクトに何らかの役に立てるなら、望外の喜びである。参考にした文献はこの記事の最後に示してあるが、ほとんどが千年以上前に出版されたものである。

神部 勉 拝 (2008年6月)

第 I 部

菩提達磨の物語

1. インドを離れるまで

菩提達磨は、中国の諸文献によると、南インドのさる王国の第三王子として生れた。その王国とはパッラバ王朝と考えられ、その都はカンチプラムにあった。幼名は菩提多羅、姓は刹帝利（Kshatriya, 王族武士階級）と記されている。

菩提達磨二入四行論（540 頃） [1]

菩提多羅の師は東インドのバラモン出身で、インド第二十七祖とされる般若多羅尊者であった。あるとき般若多羅が行化して香至国に至った。王は尊者を供養し宝珠を施した。王には三子がありその名は、第一子が月浄多羅、第二子が功德多羅、第三子は菩提多羅であった。

尊者は施された宝珠を手にとって、かの三人の王子に問うた。「この珠は円明なり。これに匹敵するもの、有りや否や。」上の二子、目浄多羅、功德多羅は兩名とも次のように答えた。「この宝珠は七宝の中でも尊貴なものであり、それを勝るものはない。尊者の道力なくしては、これを受ける者はいない。」

第三子菩提多羅は次のように答えた。「これは人の世の宝であって、最上とするには足りない。諸宝の中では法宝が最上である。また、これは人の世の光であって上とするには足りない。諸光の中では智光をもって最上とする。また、これは人の世の明り（あかり）であって上とするには足りない。諸明の中では心明をもって最上とする。珠の光明というも、珠は自ら照らすことはできない。智光があってはじめてその世光の意味を知る。智珠によってはじめて世珠の意味を知る。このように考えるとき、この宝は自ら宝とはなっていない。」

尊者はその言わんとするところに感歎し、その大法器なることを覚った。菩提多羅は王の死後、幼くして出家し、般若多羅の法を継ぎ、菩提達磨の名を与えられた。菩提達磨はインド国中を遊行し、人々を導いた。（景德伝燈録, 1004 [11]）

般若多羅尊者には次のような逸話がある：

あるとき尊者は香至国王の王室の齋会に招待された。諸人はすべて経を転読しているが、ただ尊者だけは転読をしなかった。そこで

王が尋ねた：「師はどうして転読なさらぬ。」

尊者：「貧道（わたくし）は、出息、衆縁に随わず。入息、五蘊の世界に住さず。常に如是経を転ずること、百千万巻なり。一卷、二巻どころではない。」

（宝林伝（801） [9]； 祖堂集（952） [10]）

その昔から（約 50 年ないし 100 年前）、中国を訪れたインド僧は数多くいた。特に、ブッダバダラ（仏駄跋陀羅）およびグナバダラ（求那跋陀羅）という二人の僧侶に注目すると、それぞれ別の時期に別のルートでインドから中国（漢地）に渡った（400 - 460）。前者は、北の山岳ルートを取り、後者は南の海洋ルートを辿った。二人はそれぞれ禅教の悟法（達摩多羅禅経）、大乘の経典（楞伽経）をもたらした。両者は、これらを含む多くの経典の中国訳に協力した。

特にブツダバダラの場合、かの地（長安）の大徳は禪教の頓悟の法を聞いても疑うのみで、信受することはなく、ブツダバダラは嫌われて揚子江中流域の廬山の東林寺に、仲間の中国僧と共に逃れた。その寺の法師慧遠上人は次のように尋ねた。「大徳は、何の教えもたらしたことで、嫌われたのか。」インド僧はそれには口答せずして腕を伸ばし、そこで手を結んで拳をつくり、次にその拳を開いた手を見せて、「速いでしょう」と言った。慧遠「はなはだ速い。」インド僧「これはまだ速いとはいえないが、煩惱即菩提。これは更に速いといえる。」慧遠上人はこれに深く達して、菩提と煩惱は不一不異なることを理解した。（歴代法宝記 775 [7]）

インド僧は頓教と漸教の違いを説明しようとしていた。楞伽経にはその違いを説明する一文がある。頓に生ずるとは、物体と鏡に映る像との関係の如くなのに対し、漸に生ずるとは、海水の波がその表面を吹く強風によって生ずるが如き関係のことである。慧遠上人は深くこれを信じて、その後禪門経一卷を訳出し、大小乗の禅法を明らかにすると共に、インド所伝の禅法についても、その序に述べている。インド僧は経の翻訳の後に滅度し廬山に葬られた。そこには塔廟もある。

菩提達摩は、インド僧の中国（漢地）での弘化に信受するものが無かったことを聞き知った。（祖堂集 952 [10]）

菩提達摩は般若多羅尊者から法を受けてより、インド国内で説法化導に巡遊し、67年の歳月を過ごし大衆を教化した。時に、東の中国（漢地）に大乘の機縁の熟したことをさとり、先ず般若多羅尊者のストーパに辞し、次に国王に会って、東の地に行く決意をしたことを告げた。王は留まるよう説得したが、菩提達摩の意志は決まっていた。そこで、王は将来の帰国を願うとともに、大舶を用意し（できれば同船で帰還することを願う）、親戚および臣属を率いて、菩提達摩を海に送った。（宝林伝 [9]）このとき涙のない者はなかった。（伝法正宗記 1064 [12]）

2. 中国に到来して

3年の航海を経て大師菩提達摩が広州に至ると、そこでは広州地方長官の蕭昂（しょうこう）が出迎えた。時は梁の普通元年（520）の九月であった。これを梁の武帝に奏聞すると、帝は大師を京師（天子の都建康、現在の南京）に迎える勅を下した。大師は十月に京師に至る。武帝は車輦（てぐるま）にのって、大師を出迎え、殿に請じ昇らしめて供養した。

（宝林伝では達摩の広州到着を普通8年（527）と記すが、刺史の蕭昂が広州に滞在したのは521年までだったので、伝法正宗記（1064）では、普通元年（520）と訂正している。）

武帝は達摩に問うた、「尊者は、かの国のどのような教えをもちきたるか。」達摩答えて曰く、「一字の教えをも、もちきたらず。」帝はまた曰く、「朕は寺を造り、経を写し、僧を度す。何の功德が有るや。」達摩答えて曰く、「無功德。」武帝曰く、「何を以ってか無功德という。」達摩曰く、「これは人の世の作為の善であり、作られたものである。（作られたものはやがて滅する。）形に従う影の如く、有りといっても、実には有るものではない。ゆえに無功德。」このとき、武帝この理を悟らず。

（六祖壇経 [6]；歴代法宝記 [7]；宝林伝 [9]；碧巖録 [13]）次にまた問うた、「聖諦の第一義は何か？」達摩曰く、「廓然無聖。」

帝曰く、「朕に対する者は誰ぞ。」 達摩曰く、「不識。」

武帝はこれを理解できなかつた。大師は帝とは機縁のないことを悟り、梁を離れて、揚子江を渡り、北に向つた。ある僧が武帝に、かのインド僧は仏陀の心印を伝える菩薩であつたと奏聞した。

3. 少林寺の時代

菩提達摩は十一月には魏の洛陽に至つた。洛陽伽藍記(547)によると、『菩提達摩は、洛陽の永寧寺(経典翻訳のセンターのあつた寺院)を訪れてその壮麗さに感嘆して曰く「数多くの国々を歴遊して訪れぬ所はないが、この寺の素晴らしさは他には見当たらない」と、口に「南無」と誦しつつ、幾日も合掌をし続けていた』という。(おそらく、菩提達摩はそこで翻訳に携る勤勉な中国僧も見たであろう。)

その後、嵩山の少林寺に至つて逗留し、面壁して坐禅し、終日黙然としていたので、人はこれを壁観バラモンと呼んだ。言葉はなくとも、素直な心の人々は帰依したが、姿かたちにとらわれ自己の見解に拘泥する人は、悪しざまな批判をした。

([1]; 景德伝燈録 [11])

このとき洛陽には神光なる学者(約40歳)がいた。孔子老子荘子の学に通じていた。インドから菩提達摩なる高僧が少林寺に寓居していることを伝聞し、釈迦の教えの深奥を極めるべく、その達摩大師に会うために少林に赴いた。朝に夕に尋ねんとしても、大師は口を開こうとはしなかつた。

12月のある雪の日、神光は大法を求めんがために、大師の宿の前で深夜、膝までつかる積雪の中で立ちつくしていた。(夜が明けて)大師は問うて曰く、「そちは何事のために、雪の中に立っているか。」神光はこのとき涙を流さんばかりに曰く、「願わくは、和尚、大悲大慈にて、甘露門を開き、広く衆生を度したまえ。」大師思わく、“諸仏無上菩提は小意を以て得ることはできない。行じ難きを行じ、耐えがたきを忍び、法のために不退転の意志がなければならぬ。”神光のこの不退転の意を可として、弟子として許し、慧可(えか)の名を与えた。(歴代法宝記 [7]; 宝林伝 [9])

ときに、道育、慧可なるものがあり、この二人だけは若輩ながら高邁な志をもち、法師に会えたことを幸いと、弟子として数年の間つかえ、つつましく指導を受け、よく師意を蒙つた。法師もその弟子の誠意に感動し、真の道を伝えることで報いた。[1]

続高僧伝(645, [3])によれば、神光の左臂は賊に斬られたため、なかつたという。しかし、後の史書[5, 6]はこの説は誤伝として退けて断臂の説を記す。楞伽師資記[6, 716?]の編者(浄覚)は、慧可の次の言葉(弟子の記録)を引用している:「吾、はじめて発心せし時に一臂を截り、初夜(午後八時頃)に雪中に立ちてより、直に三更(真夜中)に至つて、雪の膝を過ぐるを覚えず、以て無上道を求めぬ」と。この「法のための断臂」の話は、続高僧伝よりも早く、法淋の碑文(634)に記されている[9]。

伝法宝記[5, 712?]によれば、断臂は達摩大師の「你是法の為に能く身命を捨つるや不や」という問訊に応じて、誠意を示したのであり、「その後、大師は親密に慧可を指導した」と記している。このとき、神光は片腕のみで雪中に立っていたのかも知れない。続高僧伝(達摩示寂から百年後)の時代には、このエピソードはまだ一般に注目されるまでに至つてなかつたと推定される。慧可の断臂および立雪の逸話は、法淋碑文、伝法宝記[5]および楞伽師資記[6]から始まる。

慧可が「大師の伝える諸仏の心印とはどのようなものか、お聞かせ下さい」と問うたの

に対して、大師は「諸仏の心印は他から得るものにはあらず」と答えた。慧可はさらに問うた。「わが心はいまだ安むところがありません。願わくは、安心させて下さい。」

師曰く。「その心があるというなら持ち出してみよ。君のために安心させよう。」

慧可。「心を求めてみても、心は不可得です。」

師曰く。「われは、君のために安心させ竟った。」

達摩二入四行論（曇林） [1]

達摩二入四行論 [1] は、上に述べた菩提達摩の現存最古の伝記資料を含んでいると考えられる。この文献は、20世紀初頭に中国西北部の敦煌洞窟で発見されたもので、次に示すように、菩提達摩の根本思想が述べられている。菩提達摩の教えるところは、壁観を以って人に安心を教えることにある。『如是安心とは、壁観なり。』壁観とは坐禅、もしくは禅定のことである。慧可に諭した壁観安心は、『外には諸縁を止め、内には心の喘ぐことなく、身は牆壁の如く（坐し）、心は死灰の如く、以って道に入るべし』ということである（宗密、780 - 841）[15]。また続高僧伝（645）には『言を忘じ、念を忘じ、無得正観の坐禅を宗とする』とある。

達摩二入四行論 [1] に曰く、

- (i) 心体は体無し、それが法体である。心は色（形）に非ざるが故に有に非ず。用いて廃せざるが故に無に非ず。また用いて常に空なるが故に有に非ず。空にして常に用いるが故に無に非ず。また、自性無きが故に有に非ず、縁より起るが故に無に非ず。このような心の実性は、「如是」と表現される。それは仏陀が、時に応じて常に説いたところである。
- (ii) 達摩の語録によれば、『行往坐臥のあらゆる時、ただ無心にして、分別なく、また依倚することなく、また執着なく、終日機に任せてたんたと、あたかも癡人の如くならば、世人は君を知らず、君も人に知らしめず、不識の心は、木や石の如くであろう。これを道に入るといふ。なぜならば、法は覚知なく、法は我に無畏を施すが故に、安心の処となるからである。』このとき、凡人も聖人もなく、一心あるのみである。
- (iii) 『心が属するところ無きを、名づけて解脱となす。』
『解（さと）らざる時は、人が法を逐い、解る時は、法が人を逐う。』また次のようにある。
- (iv) 坐禅は、外には無畏を施し、内には安樂をもたらす。『坐する時は法が坐すなり。我れ坐するに非ず。我れ坐せざるに非ず。』

4. 伝法と伝衣

慧可、道育他の弟子たちは達摩大師に数年の間真摯につかえた。大師は時が来たことを感じた。大師曰く。「わたしがこの国に来たのは、もともと法を伝えるためである。今やその人を得た。一人はわたしの髓を得、一人はわたしの骨を得、一人はわたしの肉を得た。髓を得たのは慧可、骨を得たのは道育、肉を得たのは尼総持である。」（一説によれば [7, 9]、尼総持は梁武帝の息女といわれている。）

慧可が達摩大師に侍奉して六年、大師は一領の袈裟を以って慧可に付嘱し、これを用いて法信（法を奉ずるし）と為すよう言い、さらに「楞伽經」を授けて曰く、「吾れ漢地の修行者を見るに、この經が一番ふさわしい」と [5]。

大師が示寂したのは 527 年で、中国河南省の熊耳山に葬られた。梁の武帝は、達摩の訃報を聞くと、碑文によって、深い哀悼の意を表し、その法を心から讃えた（その碑は少林寺に建立されたという。[7]）後に、唐の代宗皇帝（763 - 779）は、菩提達摩に「円覚大師」および「空観」の称号を賜った。（宝林伝 801）
後代、菩提達摩の宗旨は次の四句に簡明直截に表現されて伝えられている：

不立文字 教外別伝
直指人心 見性成仏

(二入四行論、540； 六祖壇經 740)

現在は、菩提達摩の時代からおよそ千五百年である。菩提達摩と武帝とどちらの名が今より輝いているかと問えば、答えるまでもないであろう。しかし、武帝の名も忘れるわけにはいかない。菩提達摩に最初に遭遇したとき、武帝は好機を逸したが、その後、菩提達摩の訃報を聞くに及んで、深い哀悼の意を表し、碑文を奏し、その法燈を心から讃えた。実際、武帝は中国皇帝の中で、最も尊敬すべき皇帝の一人とあってよいであろう。南中国の初期仏教の時代に、仏心天子としての政策によって約五十年間在位した皇帝であった。武帝は幸運であり、かつ不運でもあった。真の菩薩にめぐり会う幸運に恵まれたが、それが如是の人であることを悟るに至らなかった。この遭遇の逸話は、11世紀に編まれた碧巖録 [13]の中で、中国禅宗の百則の公案の冒頭の第一章を飾る榮譽を得ることになった。かくして、武帝の名は菩提達摩の名と共に永遠なのである。

第 II 部

禅宗 (菩提達摩の法燈)

----- 初期の継承と発展 -----

5. 第 II 部への序

“菩提達摩の大乗壁觀の功業は最も高い”と続高僧伝の編者道宣が記したのは、達摩示寂 (528) から 100 年以上経ってからのことである (645)。達摩の継承者については世人の認識は十分ではなく、編者が詳細な情報を得るまでには至っていなかった。しかし弟子たちの間では着実に、しかし静かに、真剣に、密密に継承がなされていた。

20 世紀初頭になって敦煌で発見された楞伽師資記は続高僧伝から更に約 70 年後に出版された文書であるが、その編者の浄覚の目的は“達摩の遺文を後世に伝えるため”の私的ノートであった。その冒頭の帰依の詩文[6]は、世人の認識の浅きにかかわらず、何故、密密に伝えられたのかその事情を明らかにしているので、それを引用すると、

仏性空無相	真如寂不言
口伝文字説	斯皆妄想禅
涅槃齧鉄法	秘密不教人
心通常黙用	唯当度有縁
二乗元不識	外道未曾聞
小根多毀謗	誓願莫流布

菩提達摩の「壁觀安心」もしくは「教外別伝 直指人心」の宗旨は、すでに記したように慧可 (487-593) に相承され、更に僧璨 (? - 606) に伝えられた。689 年建立といわれる石碑「沙門釈法如禅師行状」[4] は、南天竺の三蔵法師菩提達摩は釈迦の宗を承伝して東地に來り、「魏の国に入りて慧可に伝え、慧可は僧璨に伝え、僧璨は道信に伝え、

道信は弘忍に伝えた」と記している。その意味で、菩提達摩は禅宗の祖と呼ばれ、慧可
は二祖、僧璨（そうさん）は三祖、道信（どうしん、580-651）は四祖、弘忍（ぐにん、601-675）
は五祖と呼ばれる。禅宗の伝燈がこのように承伝されて五番目の六祖の慧能（えのう、
638-713）に至ったのが、現代の禅宗の淵源である。

菩提達摩の宗旨について、次の法偈がよく知られている [6]：

吾本来茲土　　伝教救迷情
一華開五葉　　結果自然成

最初の二句は菩提達摩の東土への西来の意図が、伝教による救迷情であることを明確に
表わし、後の二句は、一華が五弁の花を開いて、果が自然に結ばれることを述べている。
人心の華が開けば、必ず果実を生むと解釈される。

この詩句はまた、その後の何代にもわたる祖師継承の果実を述べていると解釈される
ことがある。その背景には、継承初期の唐の時代には、神秀（606-706）および法如
（638-689）もそれぞれの法系統では六祖と呼ばれていた時代があったからである。この
詩句は、もしかしたらその時代に作られたのかも知れない。そこに至るまでに、消滅の
危機をはらむ困難な道と、爆発的な発展と、正統を問う反省の時期、が待ち構えていた。
初期の継承と発展の歴史は大変興味深いものである。

6. 慧可（二祖 487-593）と僧璨（三祖 519? - 606）

慧可および僧璨の時代には、570年代に二度の廃仏（仏教弾圧）の試練に耐えね
ばならなかった。僧璨が最初に慧可に相見したのはそれより前の 559 年と思われる。
慧可はそのときすでに七十歳を越えていたが、その時の様子は次のようであった [8, 10]。

その頃、慧可大師の前に一人の居士が来たりて（生れは不詳で年の頃は四十歳 [9]
とも、十四歳 [10] ともいわれる）、参じ礼拝して請うて曰く、「弟子は身に風疾を患う。
請う、和尚、弟子のために罪を懺悔せしめんことを。」（風疾： 麻痺、不随?）
可大師曰く「罪を將ち来たれ。汝のために罪を懺（ゆる）さん。」
居士曰く「罪をもとむるも得べからず。」

師曰く「我れ、汝がために罪を懺しおわりぬ」、居士曰く「何をか仏法と名づく？」
師曰く「是の心、是れ仏。是の心、是れ法。仏と法とは二無し。僧宝もまた然り。」
居士曰く「今始めて知る。罪性は内に在らず、外に在らず、中間にも在らざることを。」
大師、深く是れ法器なりと知り、居士を剃髪せしめて云く、「是れ吾が宝なり、宜しく
僧璨と名づくべし。」（璨は玉の輝き）

574年の廃仏に直面し、二人は安徽省の皖公山に隠れ、山谷寺に数年住した。ここ
で僧璨の風疾も癒え、赤頭の璨と呼ばれたという [9]。可大師は璨に告げて曰く、「菩
提達摩大師、天竺より来たりて、吾に正法眼蔵を付す。いまこの正法を汝に付し。併せ
て師の袈裟を以って信衣となせ。汝は善くこれを護持し、正法を断絶せしむることなか
れ」と告げ、楞伽經を伝えた。何も記録はないが、僧璨が禅史に語り継がれる「信心銘」
を著したのは恐らくこの頃のことであつたらう。師の慧可にこれを提示したとしても不
思議ではない。これは法燈承継の銘であつたかもしれない。そこには「信心一如」が書
かれている。「内には法を伝えて以て証心となし、外には信衣を伝えて以て宗旨とする」
と後の神会（慧能の弟子、[7]）は記している。信心銘は達摩が伝えた『心』の法燈を絶
やすまいとする意志の表れであつたらう。もしかしたら、自らの命が一本の糸にかかっ
ているかのような（弘忍から慧能への言葉 [11]）必死の思いだつたかも知れない。

隋の時代（589-618）になって廃仏の危機を乗り越え、慧可大師は再び河南省の鄴都
（ぎょうと）に姿を現わした。破衣・粗食で了然として自心を守り、城市街頭に混じり、

尋常ならざる姿をして、所を選ばず法を説き人を度したという ([7], [15] 修心要論 (弘忍))。時には人に使役されることがあって、「和尚は道人なり、使役されることなかれ」と言われたときは、「我れ自ら調心す」と答えたという [11]。これは如是の道人のやむに已まれぬ姿であったろう。

たまたま、涅槃経を講ずる寺の前で慧可が無上道を説き人を集めたとき、讒言にあり、仏法を乱した罪で捕えられ、非運 (斬首の刑) にあうことになったが、大師はこれを静かに受けた [11]。このとき百七歳であったという (593)。この慧可の非運が隋帝に奏上されたとき、帝はこれを哀しみ、朝廷を挙げて哀悼を表し、それが後に仏法の再興のきっかけとなった [7]。慧可寂後五十年後 (642)、示寂の地 (河北省磁州) には二祖山元符寺が建立された。

592, 3年の頃、璨大師が友僧と二人で、安徽省の皖公山に住んでいたとき、道信なる沙彌が来て、璨大師に礼して‘解脱の法門’を乞うた (年の頃は14歳)。師曰く「誰が汝を縛するや？」 道信「人の縛するなし。」 師曰く「人の縛することなくば、何ぞさらに解脱を求めることをえんや。」 かくの如き問答を経て、道信は師に随順すること九年、璨大師はその縁の熟するを知り、道信に衣法を付して曰く。「昔、可大師吾に法を付す。吾れ今汝を得て、これを汝に付す。吾れ今より南 (羅浮山) に往く。何ぞここに久しく滞まらんや。」 [11] 後に山谷寺に戻り、そこで示寂したという [9]。

7. 道信 (四祖 580-651) と弘忍 (五祖 601-675)

隋朝の 605 年勅令によって僧の出家が許されたとき、道信は吉州の官寺に配されることになった。この件で初めて達摩以来の祖師が公認されることになった。この勅令は、遠く日本の推古朝の聖徳太子の摂政の範となり [5]、法隆寺建立など日本仏教の興隆の機縁にもなった。

それから間もなく、湖北省黄梅県に出かけた折、道信大師は路上で、一人の風貌の変った童子 (年の頃七歳) を見かけ、問いかけて言った、「そなたの姓は何という」、童子「姓はあるけど普通の姓ではない」、師「どういう姓か」、童子「仏性です」、師「そなたには姓はないのか」、童子「私の姓は空ですから」。大師は童子が並みの子供でないことを知り、侍者を父母の家に遣わして、出家させて、童子の名を弘忍とした。 [9, 10]

道信 45 歳の頃 (624)、湖北省黄梅県 (蕪州 きしゅう) の双峰山 (東峰と西峰がある) の西峰の正覚寺 (四祖寺) に居を定め、大法を説いて二十数年、多くの帰依者が集まった。門人に勧めて曰く、「努力して勤めて坐せ。坐を根本となす。三年、五年修行せよ。わずかに飢えをふさぐ程度の食物を得て、門を閉じて坐禅せよ。経典を読むなかれ。人と語るなかれ。やがては役にたつようになる。あたかも、猿が栗の実の肉をえぐり出して喰うように、坐しながら究められよう。そのような人は実に得がたい。」

さらに、門人たちから付法の弟子を尋ねられると、ため息ついてから言った、「弘忍はやや可なり」と [5]。示寂は七十二歳のとき (651) であった。

弘忍は生まれながらに言葉少なく、仲間からは軽んじられがちだった。平生つとめて労役に服し、体を低めて人に従った。信大師は特にそれを法器と認めた。昼は使い走りの役に混じり、夜は坐禅して朝に至り、怠ることなく歳をかさねた。経や書物を読むことはなかったが、聞けばみな理解した。信大師から日頃懇切な導きを得た。 [5]

師の伝授を得た後、弘忍は東峰の真慧寺 (五祖寺) に居を定めた。そこには多くの士が集まり、十年余の間に漢地に禅が伝えられて以来、最も盛んな禅の教団に発展することになった。都洛陽の道俗の士は「蕪州 (きしゅう、黄梅県) の東山は悟りを得た人が多い」と噂し、東山法門と呼んだ。 [6]

ある人が忍大師に問うた、「道を学ぶに、何が故に城市や村落に向かわず、山居するや？」 忍は答えた「立派な建物の材は、もともと深山幽谷から出るもので、人里から出るにあらず。人里から遠く離れていれば、斧や刀で切りとられることもなく、一つ一つ大きな木材に育つ、その後始めて棟や梁としての用に立つのである。故に知る、精神を幽谷に棲ませ、遠く俗塵を避けて、自性を山中に養えば心は自然に安まる、ことを。」このように忍大師は静かに浄坐して、多くは無言で指導するのみであった。[6]

8. 慧能（六祖 638-713）

慧能の生れは、南海広東省の新州であった。地名からもわかるが、当時の新開拓の地で、それは父親が範陽（河北省北部）から左遷されてきたためといわれている。幼少にして父を失い、成人して法のために諸方に行脚して師を尋ねた。さる禅師の勧めにより、黄梅の東山に来て、弘忍大師に見え礼した（そのとき年は 32 とも [11]、22 とも [7] いわれる）。大師問う「汝は何処からきたか」、能答う「嶺南の新州より参りました。仏になることを願っています」、忍大師「汝、嶺南は南蛮なり」、能答う「身は南蛮でも、仏性は何ぞ和上と異ならんや」。大師は一見して慧能のその人となり深く了解した。その後、慧能は居士の身で弘忍大師から衣法の伝授を得て、嶺南の俗人の中にしばらく身を潜めた。

676 年（慧能 39 歳）劇的な形で慧能が姿を現わしたのは広州の法性寺（別名、制止寺、光孝寺ともいう）で、そこは印宗法師の涅槃經の講席であった。風で寺の幡がはためいているのを二人の僧が見ながら対話していた。一人は「幡動く」といい、一人は「風動く」と応酬して定まることがなかった。慧能は辛抱しきれずとうとう口を開いた。

「風動くに非ず、幡動くに非ず、貴僧の心が動く」と。[7, 10, 14]

この逸話は、日常の時における人心とは何かについて深い洞察を与えるものとして、強い感銘を人々に与えるものであった。五百年以上後になって、1228 年刊行の「無門関」において無門慧開禅師はこれを公案として採用し、次のように評した。「風の動くに非ず、幡の動くに非ず、心の動くに非ず、何れの処にか祖師を見ん」。さらに続けて「二僧は、鉄を買おうとして、金を得た」と結んだ。[14]

法性寺という寺は、実はその昔、最初に述べたグナバダラ（広州着 435）が戒壇を開いた寺であった。菩提達摩（広州着 520）もここに逗留したと伝えられている。慧能はというと、上の逸話が縁となって、同じ法性寺で具足戒を受けることになった。考えれば歴史の不思議な巡り合わせである。慧能大師はその後、広東省韶州の宝林寺（後に南華寺に改名）で教えを弘めた。

9. その後の爆発的發展

弘忍大師の東山法門からは、慧能（南宗の祖）の他に、法如、神秀（北宗の祖）、玄奘（げんざく）、智詵（ちせん）など、十大弟子といわれる禅匠が輩出し、特に慧能および神秀の弟子たちの間では、南宗と北宗の是非論が闘わされた。これは禅宗の爆発的發展の一側面であったが、慧能の弟子であってもそのような争いには無関心で、ただ密密に仏事をなす僧団もあった。南嶽懷讓、青原行思はそのような僧団を育て挙げた祖師であり、二人の門下からその後の中国禅宗が大きく展開することになった。青原の弟子の石頭希遷は、その有名な祖録「参同契」の冒頭に次のように記しているのは、その辺の事情を物語っている：「竺土大仙の心、東西密に相い附す、人根に利鈍有り、道に南北の祖なし、...」。

百年以上経った唐時代になって、達摩の法燈は朝廷から崇敬され、初祖達摩は円覚大師、二祖慧可は太祖禅師、三祖僧璨は鏡智禅師、四祖道信は大医禅師、五祖弘忍は大

満禪師、六祖慧能は大鑑禪師、と諡号が贈られた。達摩の法燈は、六祖の二人の弟子南嶽懷讓および青原行思に引き継がれ、そこからさらに五家の禅宗教団に発展した。

10. 結び

その後、五家のうちの二つの宗派、臨済宗および曹洞宗が特に、中国、日本および東アジアの国々で継承されて現代に至っている。20世紀になって臨済宗および曹洞宗の両派は世界的な広がりを見せて展開し、21世紀の今日において、人々の関心を一層ひきつける魅力を湛えている。

本稿を終えるにあたって、菩提達摩が東地にもたらした影響の深さと広さについては、あらためて強調したい。禅宗の何百の公案の中でも、最も語られる公案は、「如何是祖師西来意」（如何なるか是れ祖師西来意）であろう。菩提達摩が西国より東地に来たことによって、中国・日本を含む東アジアに革命的变化と覚醒をもたらし、さらには今では世界的な展開をみせている。「如何是祖師西来意」は、21世紀に生きる現代の我々に対しての公案でもある。

文献：

- [1] 達摩の語録（菩提達摩二入四行論）（曇林・慧可他 540 ?）；
禅の語録1（達摩の語録）、柳田聖山（1969, 筑摩書房）；
英訳：“The BodhiDharma Anthology” (The Earliest Records of Zen) by Jeffrey L. Broughton (1999, Univ. of California Press).
- [2] 洛陽伽藍記（楊衒之編、547）.
- [3] 続高僧伝（道宣編、645 - 667）.
- [4] 唐中岳沙門釈法如禪師行状（689）
- [5] 伝法宝記（杜朮編、712 ?）； 禅の語録2（柳田聖山, 1971, 筑摩書房）.
- [6] 楞伽師資記（浄覚編、713 - 716）； 禅の語録2（柳田聖山, 1971, 筑摩書房）.
- [7] 歴代法宝記（無住（四川省）の弟子、774 頃）； 禅の語録3（柳田聖山, 1976, 筑摩書房）.
- [8] 六祖壇経（790 ?）.
- [9] 宝林伝（智炬編 801）.
- [10] 祖堂集（静・筠 共編、952）； 大乘仏典 13（祖堂集、柳田聖山注釈、中央公論社）
- [11] 景德伝燈録（道原編、1004）.
- [12] 伝法正宗記（1064）.
- [13] 碧巖録： 本則・頌古（雪竇, 980-1052）, 評唱（圓悟, 1063 - 1135）.
- [14] 無門関（無門慧開、1228）.
- [15] 鈴木大拙全集 第二卷（禅思想史研究第二）： 第一篇第二（七 曇林所伝）「如是安心者壁観」； 第四篇第三（一 敦煌出土修心要論）（弘忍）、（岩波書店、1968）.

2008年6月8日

著者： 神部 勉（無際寂心、曹洞宗居士）
元東京大学教授（物理学） 理学博士、
南開大学（中国）、陳省身数学研究所 客員教授
国際理論応用力学連合理事（2004-2008）